

臨床腫瘍科 臨床研修到達目標（選択）

1. 特徴

免疫チェックポイント阻害剤、分子標的薬を含めた新規の抗がん剤の開発、次世代シークエンサーを用いた、がん遺伝子パネル検査によるゲノム医療等により、臨床腫瘍科の重要性が増しています。当科では、呼吸器領域あるいは希少がんを中心とした進行癌患者の治療、がん遺伝子パネル検査による変異解析、免疫チェックポイント阻害剤への対応、化学療法センターの運営等を行っています。当科での研修では、広い領域、広い視野での臨床・研究・教育のできる医師を育成することを目指します。さらに英語に親しむために native speaker との授業、英文症例報告の作成を指導します。海外留学を含めた各医師のキャリアを高められるような研修を考えています。また、癌の薬物療法のみならず、実臨床で役に立つように患者の全身管理、画像所見も学べるようにしています。

新専門医制度の中で「サブスペシャリティ領域専門医」として「腫瘍内科専門医」が、日本専門医機構より認定され、専門領域としても今後、発展すると考えられます。以下に到達目標を記載します。研修を通じて、テクニックではない何かを学ぶことができたと感じることを最も重要視しています。

2. ねらい

腫瘍内科医の目標として、日本臨床腫瘍学会では「臨床腫瘍学の進歩に即するがん薬物治療に精通する優れた医師を養成し、医療の向上、国民の福祉に貢献する」ことを挙げています。また、日本の癌学会、癌治療学会、臨床腫瘍学会、全国がん（成人病）センター協議会の4団体が協力してがん治療認定医機構を結成し「がん治療認定医」を養成、認定しています。「がん治療認定医」とは「がん治療の共通基盤となる臨床腫瘍学の知識およびその実践を支える基本的技術に習熟し、医療倫理に基づいたがん治療を実践する優れた医師」とされています。

がん薬物療法に精通し、安全で効率のよい抗腫瘍薬の投与ができるばかりではなく、基本的な腫瘍学全般を理解した上で、悪性腫瘍の診断、悪性度の確定、病期決定、予後判定、患者・家族と治療方針の決定、がんを標的とした治療の実施、がんの疼痛の効果的な緩和を含む緩和医療、支持療法を他の関連科やサービスと連携をとりながら腫瘍内科医が中心となっていく。すなわち集学的（multidisciplinary treatment）、多様式治療（multimodality treatment）の中心的な役割を担います。

当科での臨床研修では、上記目標に沿って、以下のコアカリキュラムを実践することを目的とします。

3. 一般目標

- ① 病棟・外来・化学療法センター業務およびがんゲノム医療を指導医のもとで研修する。がん患者の診察、治療方針決定の過程を学習する。がん薬物療法に関しては治療適応及び治療開始に際しての判断を学ぶとともに、レジメンの把握・理解を進める。
- ② 指導医のもと、病棟におけるがん患者の診察を行うとともにインフォームド・コンセントおよび患者への対応を行う。
- ③ 週1回の native speaker との授業を行う。
- ④ 英文の教科書、英語論文の抄読会を行う。
- ⑤ 症例報告を英文で作成する。
- ⑥ 当科での研修を通じて、次に記載するコアカリキュラムをビデオあるいはネットで視聴する。

コアカリキュラム

【基礎】腫瘍生物学 腫瘍免疫 原因 疫学 スクリーニング 臨床試験 統計学

【診断・病期決定】病理学 検査医学 分子生物学（細胞表面形質, 染色体, 遺伝子異常）
病期決定のための技術

【治療総論】手術療法の原理と適応と限界 放射線療法 化学療法 生物製剤
増殖因子製剤 多剤併用・合併療法 支持療法・緩和療法

【治療各論】各臓器癌

【技術】抗がん薬投与 穿刺 ドレーン挿入等

4. 研修方略

1) 指導医が直接、研修と教育を指導する。2) 多くの患者を診療すると同時に、深く学ぶことを重視する。3) 英文論文の抄読会を行う。4) 個別化医療としてのゲノム医療の実際を学ぶ。5) 基本となる教科書（内科学系と腫瘍学系）を学ぶ。6) 担当症例の地方会での発表あるいは論文作成（英文 Journal）。腫瘍の診療を通じて、内科医としてのバックボーンも研修中に身につける。

5. 研修スケジュール

週間スケジュール	
月曜日	午前 病棟患者の診療 外来実習 午後 入院患者への対応
火曜日	午前 病棟患者の診療 外来実習 午後 抄読会
水曜日	午前 課題の学習 症例報告の準備 午後 English Class
木曜日	午前 病棟患者の診療 午後 抄読会
金曜日	午前 がんゲノム外来の実習 午後 病棟患者の診療
土曜日	午前 自由学習

6. 研修評価

1) 自己評価：PG-EPOC を用いて自己評価を行う

（症候、疾病・病態の経験については PG-EPOC にて確認を行う）

2) 指導医による評価：PG-EPOC を用いて研修医を評価する

（症候、疾病・病態の経験については PG-EPOC にて確認を行う）

3) 研修医による研修体制評価：PG-EPOC を用い診療科全体（指導内容、研修環境）を評価する

7. 指導体制

指導責任者

青木 琢也